

古文 読解問題 「徒然草」 「をりふしの移り変わる」 ① 問題

①をりふしの移り変はること、ものごとにあはれなれ。「もののあはれは秋こそ^(a)（まさる）。」と、人ごとに言ふけれど、それもさるものにて、いまひとときは心も浮きたつものは、春の気色にこそあめれ。鳥の声などもことのほかに春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草萌え出づるころより、やや春深くかすみわたりて、花もやうやう氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うち続きて、心あわたたしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、ようづにただ心をのみぞ^(b)（恼ます）。花橘は名にこそ負へれ、なほ、梅のにほひにぞ、いにしへのことも立ち返り恋しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏のころ、祭りのころ、若葉の、梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ。」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふくころ、早苗とるころ、水鶴のたたくなど、心細からぬかは。六月のころ、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭ることなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて^(c)（来）ころ、萩の下葉色づくほど、早稻田刈り干すなど、取り集めたることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひ続くれば、みな「源氏物語」「枕草子」などにことふりにたれど、同じこと、また今さらに言はじとにもあらず。おぼしきこと言はぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、②人の見るべきにもあらず。

問一・次の「徒然草」について説明した文の(ア)～(エ)に入る言葉を答えなさい。

「徒然草」は（ア）時代に（イ）によつて書かれた（ウ）文学である。世の中の全てのものは絶えず変化し続けているという（エ）に基づくいた日々の出来事について書かれている。

問二・空所(a)～(c)の動詞を活用を必要とする場合には正しい形に、必要のない場合には原形のまま書きなさい。

問三・傍線部①「をりふしの移り変はること、ものごとにあはれなれ」を現代語訳しなさい。

問四・作者は「秋」の風物としてどのようなものがあると述べているか、本文中から全て書き抜きなさい。

問五・傍線部②「人の見るべきにもあらず。」とあるがなぜ作者はそのように述べたのか、次の選択肢から最も適切なものを選びなさい。

ア・筆の赴くままに思いつきを書きつけたものであり、人に見せるつもりがなかつたから

イ・「源氏物語」のような有名な作品に比べ、自らの文章が未熟で劣つていて感じていたから

ウ・時代の権力者や貴族に読まれると政治的に不利になる内容が含まれていたから

読解問題「徒然草 ～～をりふしの移り変わるこそ～」① 解答・解説

問一. (ア) 鎌倉 (イ) 兼好法師・吉田兼好 (ウ) 隨筆 (エ) 無常

問二. (a) まされ

(b) 悩ます

(c) 来る

問三. 季節が移り変わることは、それぞれにつき趣き深い

問四. 七夕、夜寒、雁、萩、早稻田刈り、野分の朝

問五. ア